

## 第1章 第二海堡を巡る歴史的環境

### 第1節 海堡とは

海堡とは、海中の人工島に作られた砲台のことをいう。海中を埋め立てて人工の島を造り、その上に砲台を築いた防衛施設で、一般に港や湾内を防衛するため、その入口付近に築造されたものである。幕末期の安政元年（1854）に品川沖に築かれた品川台場、鹿児島市街沖合の岩礁に築かれた弁天波戸台場などが、日本における最初の海堡である。明治から大正期に東京湾に三個の海堡が築かれた。浦賀水道航路にあった第三海堡は、船の難所として知られていたが撤去された。

海堡は、慣用読みで「かいほ」と言われているが、正しくは「かいほう」と読む。“堡（ほう）”は砦を意味する。『広辞苑』（第5版）によると、「海上に築造した砲台」と記載されている。「海堡」という言葉を使い始めたのは明治期に入ってからで、江戸時代以前は、陸上と海上とは分けずに、どちらも「台場」と呼称していた。嘉永6年（1853.）6月3日のペリー艦隊来航直後の7月25日に、葦山の代官江川太郎左衛門英龍（1801～1855）は富津岬の先に海堡を建造する必要性を説く意見書を提出しているが、その意見書では「富津埋立御台場」あるいは「海中ニ新築御台場」という言葉を用いている。

また、海堡は英語で fort（要塞）だが、fort は海堡以外の陸上の要塞も含んだ言葉である。そのため、正確に海堡を表現しようとするとき、“marine fort” “fort on the sea” “fort on an artificial island” になる。

明治期に陸軍は、首都東京と横須賀軍港などを防護するためには、東京湾入口の沿岸に築いた砲台だけでは、砲の射程上、敵艦船の侵入を防止できないとして、海中に3ヶ所の海堡を築いたのである。すなわち、東京湾内の最狭部である千葉県富津岬と神奈川県走水の間、北から第一海堡、第二海堡、第三海堡の3海堡を築いたのである。これらの海堡を建設するに当たって、陸軍は欧州ですでに建設されていた海堡、特にイギリスのポーツマス要塞のスピットバンク海堡・スピチート海堡、ロシアのクロンシュタット要塞の丁字海堡などを参考にしたのである<sup>1)</sup>。

第一海堡は、明治14年（1881）8月に着工し、明治23年（1890）12月に竣工した。第二海堡は、明治22年8月着工し、大正3年（1914）6月に竣工した。第三海堡は明治25年（1892）8月に着工し、大正10年3月に竣工したが、2年後の大正12年（1923）9月の関東大震災で大被害を受け、大半が崩壊して海没したため除籍・廃止された<sup>2)</sup>。

#### 註・参考資料

- 1) 「富津海堡要領並説」（陸軍築城部本部編：『現代本邦築城史』第2部第1巻、東京湾要塞築城史付録、国会図書館古典籍資料室蔵）
- 2) 「東京湾要塞海堡之略説」（千代田史料、防衛研究所蔵）、東京湾要塞司令部「東京湾要塞歴史」第一号（国会図書館憲政資料室蔵）。茶園義男編：『東京湾要塞司令部極秘史料』第1巻（現代史料出版）、2004、P163

### 第2節 海堡建設意見

#### 1. 幕末期の海中台場（海堡）建設意見

幕末期に幕府は、江戸を防衛するために江戸湾入口付近に多数の台場を築いていたが、嘉永6年（1853）6月3日ペリー艦隊が来航し湾内に侵入したことにより、湾沿岸の台場のみでは艦船の侵入を防止できないことが判

明した。このため急遽、品川の沖合に品川台場が築かれた。これが日本における最初の海堡であった。当時、すでに以下のような海中台場建設意見が出されていたが、幕府は緊急性を認識せず、ペリーの江戸湾侵入により、初めてその必要性を認識したのである。

#### (1)江川太郎左衛門の意見<sup>1)</sup>

伊豆韮山代官の江川太郎左衛門は、ペリー来航前の天保8年(1837)のモリソン号事件に刺激され、江戸湾防備を強化する意見書「相州御備場其外見分見込之趣申上候書付」を天保10年に幕府に提出し、その中で、富津の出洲の小三塚は満潮時でも深さ2尋(約3.6m)以下なので、ここに台場を築くと好都合であると述べた。

#### (2)川越藩主松平斉典の意見<sup>2)</sup>

嘉永2年(1849)川越藩主松平斉典は、江戸湾口の観音崎地域の防備を担当する藩主として、湾口のみでは外国船の侵入を防ぎきれないので、富津隠洲を埋め立て台場を築くべきであると幕府に進言した。

#### (3)江川の再度の意見<sup>3)</sup>

ペリー来航直後に、若年寄本多忠徳・勘定奉行川路聖謨などと江戸湾を巡視した江川は、巡視結果に基づき嘉永6年(1853)7月、建議書「海岸御見分ニ付見込之趣申上候書付」を提出し、江戸湾防備のため軍船を備えるとともに、羽田沖から富津岬の間に海中10町(約1,000m)ごとに台場を築くべきであると主張した。しかし、種々検討の結果、工事が容易でしかも江戸を直接防衛できる品川沖に建設することになり、品川台場が建設された。

#### (4)軍艦頭取小野友五郎の意見<sup>4)</sup>

攘夷熱の高まる中の文久3年(1863)1月、軍艦頭取小野友五郎は、江戸湾防禦意見書「江都海防真論」を上申し、江戸湾入口の旗山岬と富津の間に3ヶ所の海中台場、富津の洲の上に3ヶ所の台場を築くとともに、品川台場を強化し、小型蒸気砲艦と連携して江戸湾を守るべきであると主張した。明治期に3ヶ所の海堡が実際に建設されたが、海堡の原点はこの小野友五郎の意見であった。

以上のような意見も、当時の財政事情、技術的問題、とりわけ政治情勢により、江戸直接防衛の品川台場が具体化しただけで幕府は倒れ、明治維新となったのである。

## 2.明治期の海堡建設意見

明治になって初めて東京湾内に海堡を建設すべきことを述べたのは、フランスから招聘した教師団長マルクリー中佐であった。

#### (1)マルクリー参謀中佐の意見<sup>5)</sup>

フランス教師団長マルクリー参謀中佐は、明治5年(1872)4月に来日して、明治6年(1873)9月に「海岸防禦法案」を提出し、東京湾口の最狭部である観音崎と富津の間は防御の要点であるので、両岸の砲台の他に富津洲中に海堡を建設し、猿島にも砲台を築き、さらに水雷を布設すべきであると述べ、これでも湾口の守りは十分でないので、東京・横浜・横須賀の直接防衛のため砲台と水雷を準備すべきであると述べた。

#### (2)鳥尾小弥太の意見<sup>6)</sup>

陸軍省第六局長鳥尾小弥太少将は、明治6年(1873)12月、「東京湾海防策」を上申し、マルクリー中佐と同様、富津の暗洲に砲台を築き、湾口を守るとともに東京・横浜・横須賀の直接防衛として砲台を築くべきであると主張した。

#### (3)黒田久孝・牧野毅少佐の意見<sup>7)</sup>

兵学寮少教授黒田久孝少佐と参謀局牧野毅少佐は、明治7年(1874)12月、連名で「東京湾防禦案」を上申

し、東京湾防御は観音崎海峡地区で重点的に実施すべきであり、富津岬の先方の洲中に二層ないし三層の鋼製覆壘を築いて約 60 門の砲を据え、富津岬・観音崎・走水・猿島にも砲台を築き、それぞれ 10～20 門の砲を据え、さらに水雷・軍艦などを備え、これらと連携して防御すべきであると述べた。

#### (4)ルボン砲兵大尉とジュールダン工兵大尉の意見<sup>8)</sup>

フランス教師団のルボン砲兵大尉とジュールダン工兵大尉は、明治 8 年 (1875) 7 月「日本国南部海岸防禦法案～第 3 編東京湾東京府並ニ横須賀武庫ノ防禦」を提出し、富津の砂州に小規模の砲台を築くべきであると述べた。

#### (5)原田一道・牧野毅・黒田久孝の意見<sup>9)</sup>

明治 8 年 (1875) 10 月、参謀局原田一道大佐・牧野毅少佐・黒田久孝少佐は、全国の防御地点と各砲台建設着手順序について山県陸軍卿に意見を上申したが、その中でもサラトガ洲 (富津の砂州) に砲台を築くべきであると主張している。

明治になって、以上のような海堡建設意見が提出されたが、どちらかというとな上の計画で、実行の可能性に問題があり検討の結果、明治 9 年 (1876)、東京湾入口の観音崎・富津・猿島の三か所に砲台を築くことに決定して、用地買収に着手した。しかし翌年の西南戦争のため一時中断された<sup>10)</sup>。

### 註・参考資料

- 1) 「御備場集義」二 (国立公文書館蔵) /勝海舟全集刊行会編：『陸軍歴史』上 (改造社、1928、(株)原書房復刻、1967)、pp377-378
- 2) 前橋藩松平家「記録」相州七番 (前橋市立図書館蔵)
- 3) 「大日本維新史料稿本」第一七一六 (東京大学史料編纂所蔵) 東京市保健局公園課編：『品川台場』 (東京市、1927)、pp24-27
- 4) 小野友五郎「江都海防真論」 (東京大学史料編纂所蔵) 慶応義塾大学図書館編『木村撰津守喜毅日記』 (塙書房、1977)、p111
- 5) 陸軍築城部本部「現代本邦築城史」第 1 部第 1 巻、築城沿革付録 (国会図書館貴重書室蔵、以下「築城沿革付録」と略す)
- 6) 「築城沿革付録」
- 7) 「築城沿革付録」陸軍省編：『陸軍省沿革史』、1905)、pp111-116/ 陸軍省編：(大山梓編『山県有朋意見書』付録、(株)原書房、1966)、pp111-116
- 8) 「築城沿革付録」
- 9) 「築城沿革付録」
- 10) 原剛『明治期国土防衛史』、錦正社、2002、p80

## 第 3 節 東京湾要塞砲台の建設

### 1.国土防衛の具体化～海岸防御取調委員の設置と砲台建設開始

東京湾海堡計画は、幕末の江川太郎左衛門による江戸湾口海中台場計画に始まった。しかし、これが具体的計画へと動き出すのは、明治新政府が日本列島の要塞化に取り組み、その一環として東京湾海防に取り組み出してからであった。

明治4年（1871）、山県有朋は「軍備意見書」を提出し、日本列島の要所に海岸砲台を築くことを提案した。沿海の防御については、「沿海の防御を定む。即ち戦艦を造る也。海岸砲台を築く也。」と述べている。山県は、日本列島の要所に海岸砲台を築き、その間を動く砲台である戦艦で防衛しようとしたのである。

西南戦争という国内的一大危機を乗り切った政府は、本格的に對外防衛に力を入れることになった。陸軍は、明治11年（1878）7月陸軍省参謀局に海岸防御取調委員を設置し、黒田久孝少佐・牧野毅少佐・浅井道博中佐などを委員に任命した<sup>1)</sup>。同委員はまず東京湾口の砲台建設地の調査を開始したが、同年12月に参謀本部が設置され、海岸防御取調委員は参謀本部の管轄となり、引き続き全国の海岸防御地点の調査に着手した<sup>2)</sup>。

海岸防御取調委員は、明治12年（1879）9月に調査結果を「海岸防禦結構着手ノ順次意見」として提出し、全国海岸のうち重要な防御地点は第一に東京湾海門、第二に大阪湾・紀淡海峡、第三に下関海峡であるが、最も重要な東京湾海門からまず着手すべきであり、さらに東京湾海門の中でも第一に観音崎、第二に猿島、第三に富津岬の順で着工すべきであると具申した<sup>3)</sup>。また、富津岬の砂州については、地質調査をして決めるべきであると述べた。

かくして、明治13年（1880）5月、観音崎第二砲台の建設工事が開始され、続いて観音崎第一砲台の工事が開始された。これが日本における最初の要塞砲台建設であった<sup>4)</sup>。

続いて明治14年（1881）8月、富津海堡（後の第一海堡）の工事が開始され、同年11月に猿島砲台、明治15年（1882）1月に富津元洲砲台、8月に観音崎第三砲台の工事が開始されるなど、着々と東京湾口に砲台が築かれていった<sup>5)</sup>。その経緯は以下のとおりである。

「東京湾口砲台築設要領」（東京湾要塞築城史付録）

#### 1)観音崎

観音崎には4個の砲台を建設することとし、設置予定の大砲は次の通りであった。

第一砲台—— 24cm砲2門

第二砲台—— 24cm砲6門

第三砲台—— 28cm砲2門

第四砲台—— 21cm砲2門

#### 2)猿島

猿島には3個の砲台を建設することとし、設置予定の大砲は次の通りであった。

第一砲台—— 28cm砲1門

第二砲台—— 24cm砲2門

第三砲台—— 21cm砲4門

#### 3)富津

富津岬は東京湾口第一の要地なので、ここに海堡を建設することとした。しかし、①海中にあること、②基礎地盤が砂であることより、工事の難航が予想されたので、明治8年（1875）以来、水深を測ったり、地質を検査したり、潮流を観測したりしてきた。明治13年（1880）8月には、富津脇塚に捨石をおいて試験したが、数度の台風にも遭遇してもその水中の位置は不変だったので、この州上に海堡を建設できると確信した。

その結果、ロシアの丁字海堡に準拠することとし、両翼を曲げて観音崎と猿島に正対させ、21門の大砲（28cm砲3門、21cm砲12門、17cm砲6門）を据え付けることとした。

#### 4)富津元洲

富津海堡から東2,400mの富津元洲に、富津海堡を補佐し、敵軍の上陸を妨げるため、富津元洲砲台を建設し、17cm砲2門、15cm砲4門を設置することとした<sup>9)</sup>。砲台下部は伊豆の本山石で被覆した。

#### 5)走水

走水に砲台を建設し、21cm 砲 4 門を設置することとした。

### 2.富津海堡（第一海堡）の建設

前述した海岸防御取調委員の具申に基づき、明治13年（1880）8月、富津の砂州脇塚に試験的に捨石が開始された。試験の結果、海堡建設に確信を持ち、さらに内務省お雇いのオランダ土木技師ムルドンの現地視察を受けてその意見を聞き、明治14年（1881）8月に基礎の埋立て工事に着手した<sup>6)</sup>。

海堡の構造については、フランス教師団からイギリス・フランス・ロシアなどの海堡に関する情報を入手し、それらを参考にし、特に形状はロシアのクロンスタット要塞の丁字海堡を、内部構造はイギリスのポーツマス要塞のスピチート海堡を参考に設計したのである<sup>7)</sup>。

工事が着々と進行中の明治16年（1883）7月、陸軍はオランダから東京湾砲台建築顧問としてワンスケランベック工兵大尉を招聘し、早速8月に海堡建設についての意見を求めた。同大尉は、基礎の堰堤の核心部分は粘土と砂を使用した方が、工費が少なくて済むとの意見であったが、砂は工事中に風波のあるごとに流出するので、核心部分も全て割栗石を使用することに決定した<sup>8)</sup>。富津海堡（第一海堡）は、明治23年（1890）12月に竣工した。

#### 註・参考資料

- 1) 陸軍省：『陸軍省日誌』明治11年第25号（防衛研究所蔵）/朝倉治彦編：『陸軍省日誌』第6巻（東京堂出版、1988）、p57
- 2) 原剛：『明治期国土防衛史』、(株)錦正社、2002、p96
- 3) 「築城沿革付録」
- 4) 「東京湾要塞防禦營造物起工竣工期日一覧表」（「東京湾要塞歴史」第1号）/『東京湾要塞司令部極秘史料』第1巻、p88
- 5) 「東京湾要塞防禦營造物起工竣工期日一覧表」（「東京湾要塞歴史」第1号）/『東京湾要塞司令部極秘史料』第1巻、p88
- 6) 「富津海堡要領並説」/「東京湾海堡基礎築設方法及景況取調書」明治39年8月（「東京湾要塞築城史付録」
- 7) 陸軍省：「東京湾口砲台築設要領」富津（「東京湾要塞築城史付録」）/「富津海堡要領並説」
- 8) 陸軍省：「東京湾海堡基礎築設方法及景況取調書」、1906.10、米国公文図書館蔵